OAへの転換シナリオ概略表

報告書中で示された各シナリオの特徴およびSWOT分析について、簡易的に一覧化したもの。報告書本体には具体例も交えてより詳述されているので、詳しくはそちらを参照されたい。

■OAへの転換を促進する要素

大区分	小区分	関連のある出版者のタイプ	前提条件	関連のある分野	転換の目的	強み	弱み	機会	脅威
6.1 利害関係者からの圧力	1 政府や資金提供者のインセンティブ	すべて	Scienceの分野の出版者やジャーナルであること。 （著者がOA出版に利用可能な資金源を持つ分野）	STM （ただし、SSHも対象とする制度はある）	・市場の状況に変化をもたらす。 ・転換したジャーナルを直接支援する。	ゴールドOA義務化や助成プログラムはAPCマーケットをより広く予測可能なものにする。 SSHでは、ジャーナルを直接助成するケースが多い。	成功している購読型ジャーナルがOAに転換するほどの財政的メリットがない。 代わりに、OA義務化にハイブリッドOAによって対応し、さらなる収益を得ようとする可能性がある。	こういったトップダウン型の手法は、OAへの転換を加速させる可能性がある。	ポリシーをきちんと練らなかった場合、 ・APCの高騰 ・移行段階ではなく、着地点としてのハイブリッドOAを招く可能性がある。
	2 著者・学会員・編集委員会からの圧力	商業出版社、学会	著者・学会員・編集委員会など、いろいろな構成員による強い支援があること。	すべて	・独立性の確保。 ・アクセスおよび資料の許可される利用範囲の拡大。	編集委員会と多数の研究者が結集して要求をおこせば、ジャーナルの存立にもかかわる大きな圧力を与えることができる。	すべての研究者がOAは重要だと考えているわけではない。 学会誌の場合は、転換が学会員としてのメリットを薄れさせる可能性。	研究者は専門分野の出版の在り方に大きな影響力をもつ。ただし、変化を起こすには十分に多くの研究者の参加が必要。	商業出版誌にしても学会誌にしても、そのジャーナルや学会に深刻なリスクをもたらす可能性がある。 出版者と慎重に妥協点を協議する、という方法が堅実かもしれない。
6.2 APC以外の資金源	1 国による学術雑誌助成	学会、大学の学部、研究グループ	小学会・大学・研究者が運営するジャーナルであること。	SSH	・アクセス/読者/引用数を増やす。 ・小規模雑誌を持続可能にする。	転換に伴う財政的リスクを減らす。 APCやその他資金源にかかわる問題や制限を避けることができる。	助成が長期間継続するかどうか分からない。	購読料収入だけで運営していく見通しが立たないジャーナルの継続に道を開く。	将来変更・中止されるかもしれない外部資金へ大きく依存している。
	2 転換のための時限資金	すべて （商業出版社は関連が薄い）	転換中・転換後の財務面の見積もりも含めた明確な移行計画を立てること。	すべて	・財政的な問題の軽減。 ・ジャーナルに関わる学術コミュニティの維持。	転換コストの少なくとも一部をカバーできる。 転換を早め、成功に導く。	転換に際して一時的な追加資金が必要となるが、この種の時限資金は常に使える訳ではない。	この時限資金によって転換が可能になるジャーナルもあるし、他のジャーナルにとっても転換の促進効果がある。	転換の助けにはなるが、転換後の成功のためには明確で長期的なビジネスプランが必要。
	3 冊子の購読料収入でOAをまかなう	すべて	・転換前から冊子のジャーナルを発行していること。 ・（望ましい条件）購読者が多いこと。	すべて	・冊子の購読料収入をOA出版費用に充てながら、OAの利益を得る。 ・他の資金獲得手段への依存度を下げる。 ・読者を増やす。	冊子を好む読者とOAの利点の両方を得ることができる。	OAに転換しても、冊子購読を続ける読者がじゅうぶんに必要。 ページ数や号割りなど、冊子出版としての制限を受け続けることになる。	OA出版のための安定的な収益を得られる可能性がある。	冊子販売を継続できないほどに、冊子購読がキャンセルされてしまう可能性。

■OAに転換する15のシナリオ

大区分	小区分		関連のある出版者のタイプ	前提条件	関連のある分野	転換の目的	強み	弱み	機会	脅威
資金源＝APC	7.1 投稿料を課す		すべて （APCを扱っている出版者がなじみやすい）	多くの"non-serious"な投稿への対応に困っているジャーナルであること。	すべて （リジェクト率の高いジャーナルに適している）	著者側の支払いによって成立するビジネスモデルの採用。	わずかな投稿料の設定でも、"non-serious"な投稿への対応に割く時間を減らせる可能性。	投稿料は収入としては総計してもわずかである上、課金の際に固定の取引費用もかかるので、収入源としては価値がほとんど無い。 また、低額な投稿料でも良質な投稿を阻害する可能性。	投稿料はAPCを補完する資金源として機能する可能性がある。	良質な投稿を逃す恐れ。収入としてはあまり多くない一方で、課金の経費は結構かかる。
	7.2 段階的に完全なOAへ移行する	1 ハイブリッドOAを経由する	商業出版社、学会	・APC助成が利用可能であること。 ・ハイブリッドオプションの選択率増加の状況。 ・（望ましい条件）多くの投稿数や、確立した引用メトリクスの数値を持っていること。	STM	・アクセス/読者/引用数を増やす。 ・収入を増やす。 ・投稿量と出版量を増やす。 ・利益が増える可能性。 ・購読での継続性が危ぶまれるジャーナルの救出。 ・OA義務化への対応。	転換による財政的リスクの軽減。著者層のAPCモデルへの関心を評価する機会になる。	OAへの移行期間の長期化。購読型を維持したまま、OA義務化などの外圧を解決できてしまう。	この方法を通じて、購読モデルで成功している出版者も、OAへの転換を検討するかもしれない。	コントロールを行わないと、移行期間に購読料とAPCの二重取りが発生し、学術コミュニティの負担するコストが増大する。
		2 APCを機関購読契約と組み合わせる	購読型ジャーナルとAPC型ジャーナルの両方を持っている出版社	この条件下で出版した論文について購読料に組み込む仕組みを持っていること。	すべて	・OA出版環境の向上を求める購読者との関係維持。 ・そのジャーナルのポートフォリオにおけるOA選択率の向上。 ・著者支払いモデルを採るOA転換誌の成長	購読機関との関係を維持したまま徐々にOAに移行できる。出版社にとって売りやすく、購読のみの契約と値段が据え置きであれば購読機関側にも利益がある。	個々のAPC価格への敏感さが失われる。	即座の転換をする必要がなくなり、転換の決断をする前にどのジャーナルがOAでうまくいく見込みがあるか見極めることができる。	APCの価格が問題の中心ではなくなるので、このモデルでの契約を結んでいない機関にとってAPCの価格水準が法外になる可能性。 このモデルが広がると中小規模のOA出版社・学会を駆逐する可能性。
		3 Delayed OAを経由する	学会、大学 （潜在的には商業出版社も）	出版者やジャーナル所有者が段階的に完全なOAに転換したいと考えていること。	すべて	・読者を増やす。 ・アクセスを促進する。 ・引用数増加の可能性。	完全なOAへの転換の前に利益とリスクを評価する手段となる。転換後も冊子販売を継続する予定の場合、購読者の意向を試すことができる。OAのメリットの一部も享受できる。	完全なOAへの転換に伴う潜在的危険の評価・回避手段としては十分ではない。	完全なOAへの転換を実施する前に、ジャーナルのコンテンツをより提供準備のできた状態にすることができる。OAの効果を評価する機会にもなる。	Delayed OAはOAビジネスモデルへの転換リスクを緩和することにはならない。
	7.3 OA転換を機に対象領域やサービスを変更する	1 ジャーナルのブランド再構築および対象領域変更	学会、商業出版社	ジャーナルの核となる特徴の変更を利害関係者が支持していること。	APC資金源のある生命・自然科学系	著者/読者/出版量/引用数の増加。	対象領域を広げることでより広く投稿を集めることができる。投稿の増加はAPCモデルを支えることにつながる。	現在ジャーナルを支えている学術コミュニティが離れていってしまうリスク。 明確に定義された地域ジャーナルが、ありふれた国際メガジャーナルになってしまう可能性も。	適切に行えば、投稿数・アクセス・引用数の増加を見込める。	対象領域を広げたり国際的な方向性へ舵をきったりすると、投稿の減少やこれまでジャーナルを支えてきたローカルな構成員を失うという悪い結果を招く可能性がある。
		2 明確に定義されたセクションを別ジャーナルに分離する	すべて	明確にわかれた論文セクションを持つジャーナルであり、分離後も母体ジャーナルと新ジャーナルが両立できるくらい十分な投稿量があること。	APC資金源のある生命・自然科学系	・人気のあるサブセクションに成長の余地を与える。 ・リスクを最小限にしてOAパイロットを行う。 ・出版者のジャーナルポートフォリオを成長させる。	新ジャーナルに分離するのはOA出版を始めるのに低リスクな方法。 そして出版者と学術コミュニティもこの出版モデルの経験を得ることができる。	OAが新ジャーナルにのみ関わるものであれば、母体ジャーナルは購読型のままである。	成功すれば母体ジャーナルも後に続いてOA化する可能性。	新ジャーナルと母体ジャーナルの両方が投稿を集めにくくなるリスク。学術コミュニティの細分化を招く可能性も。
	7.4 OA転換後の出版者について	1 同じ出版者に留まる	学会	高いランクのジャーナルであり、多くの出版量を持つか、狭いフィールドで購読数の少ないもの	STM	ジャーナルの収入とインパクト、読者を増やす。	OAへの転換後も、編集者を含めたジャーナルのすべてのインフラを維持できる。	APCを支払う資金のない著者の投稿意欲を削ぐ可能性。	成功すれば、出版者はもっと多くのジャーナルの転換を検討するかもしれない。ジャーナルのインパクトも高まる可能性。	限界費用をカバーするために十分な投稿数やAPC収入を得られない場合、転換前とは異なった苦しい状態に置かれる可能性。
		2 出版者を変更する	学会	・OAモデルを学会員が支持していること。 ・転換後の出版者との実現可能なビジネスモデルを構築すること。 ・現在の出版者との契約終了処理を行うこと。	すべて	・そのジャーナルに適したOA出版モデルの出版者に変更する。 ・そういった出版者に変更することでOAの利益を得る。	権利やライセンスのことも含めて、出版契約の再評価と再交渉によりきちんと計画した転換ができる。	出版者の変更は、出版ワークフローに甚大な変更をもたらす。アーカイブの利用権の交渉・獲得は、費用・労力ともに甚大。読者や著者への追加のマーケティングが必要となる。	よく組織され評判の高い出版者に移行することは、ジャーナルの名声を高め、投稿数や引用数を増やす可能性がある。	ビジネスモデルと出版者の変更を同時に行うことは深刻な財政的影響を及ぼす可能性がある。著者や読者を困惑させ、投稿が減るなどネガティブな影響が出る可能性がある。
		3 低コストの出版社・出版事業者と出版契約を結ぶ	学会、特定利益集団、大学、図書館、そのほかの研究者グループ（1～数誌のみを保有している組織）	出版主体が、比較的少ない論文数しか出版しないジャーナルを1～数誌もっている学会やグループであること。	専門的、地域的、ニッチなジャーナル。SSHに適している。	・読者を増やす。 ・コストを減らす。 ・専門的な出版サービスを提供する。 ・ボランティアの必要性を減らす。 ・self-sustainingなビジネスモデルを推進する。	十分な出版スケールのない組織に対して、低価格で質も担保された出版事業を提供する。 資金源の問題を軽減し、安定したビジネスモデルを築きやすくする。	基礎的なサービスのみのことが一般的なので、著者と読者にとって重要となる、質の高い原稿整理などは望めない。	調達可能な資金源がほとんどない分野において、持続可能なビジネスモデルを実行できる可能性。	とりわけ人文・芸術の分野において、質の高い原稿整理が為されないことは、ジャーナルの評判を下げる可能性がある。
		4 大手学術出版社と出版契約を結ぶ	学協会	質の高い英語ジャーナルであること。	すべて	[獲得出版社側]質の高い非欧米圏ジャーナルのカバー範囲を増やす。APCモデルは利益拡大の可能性がある。 [ジャーナル側]認知度と権威の向上につながる。国際的に読者や投稿を増やす。大手学術出版社の経験とインフラを得る。	認知度の向上。全編集過程へのサポートを提供する技術的インフラの利益を享受できる。	独立性を失う結果になる可能性。APCの導入により、その地域の著者の投稿を阻害してしまい、これまで支えてきてくれたローカルな著者や読者が離反する恐れ。	読者と著者両面で国際化の可能性。出版社にとってはジャーナルポートフォリオの多様化というメリット。	地域・分野のアイデンティティや、ローカルな著者の支えという強みが失われる可能性。
資金源＝APC以外	8.1 学会による資金拠出		学会	出版主体が、会費や会議参加料などで財政的に良好な学会であること。	すべて	・ジャーナルのインパクトを高め、学会員とその研究分野に貢献する。 ・学会のイメージ向上。	こういったジャーナルは良好に運営されているが、転換により投稿をさらに増やすことができる可能性。	学会のほかの活動やリソースを削減することになる可能性。学会員であることのメリット感が失われる。	ジャーナルの認知度向上、それによる学会のイメージ向上の可能性。読者の増加や学会の目標の前進が見込める。	学会員に学会誌を無償で提供していた場合、転換により会員を失うことになる可能性。これは購読料収入を失うことに加えて学会の財政に悪影響を与える。
	8.2 低コストインフラとボランティアの活用		大学、研究者主導型、小規模学会	出版主体が、じゅうぶんな人数のボランティア（専門的技術も求められる仕事もある）と、現物支給を提供する組織であること。	資金源が限られている状況 （人文科学系に多い）	他に資金を得る手段のない分野や地域でOAの利益を得ること。	ボランティアは全体のコストを下げる。学部生・院生が労働力としてつかわれ、このことは学生にとってもジャーナルにとっても利益がある。	ボランティアの人数を維持するのが難しい。専門的な技術も必要であり、そういった人材をみつけるのも難しい。こういった制限のため、このモデルは主に出版量の少ないジャーナルに使われる。	OAへの転換が実現困難なジャーナルにも転換の手段を与える。	長期間にわたり、ジャーナル運営に必要なボランティアを維持することは難しい可能性。多数の投稿に対応するのは難しい。ボランティアの採用・訓練・維持に必要な労力は甚大で、このことがジャーナルを廃刊に追い込む可能性。
	8.3 各国・地域のジャーナルプラットフォームへの参加		学会、大学の学部、研究グループ	・冊子購読やそのほかの手段によるじゅうぶんな収入があること。 ・（望ましい条件）じゅうぶんな出版実績と掲載論文の質の高さ。	すべて	・アクセス/読者/引用数の増加。 ・プラットフォームによって質のコントロールがされるため、参加ジャーナルは一定の地位を得られる。	プラットフォームへの参加は無料もしくはかなりの低コストなので、OAへの転換コストを下げられる。	出版コストをある程度削減できるが、ほかにも多くのコストはかかり、それをカバーする収入やサポートが不可欠。	個々のジャーナルの技術的保守のスタッフを減らせる。個別のwebサイトで公開するよりも発見性があがる可能性。	とくに途上国では、ほかのコストをカバーするための資金源を探すのが困難。
	8.4 コンソーシアムや図書館協力補助金モデルへの参加		すべて	実施に必要な数の組織がコンソーシアムの条件について合意にいたること。	すべて	・大規模で持続可能なOA出版モデル。 ・追加のジャーナルや、新たな参加組織も加わる可能性。	リソースの有効活用の可能性。APCへの依存から解放されることにより、ジャーナルの安定性と予測可能性が向上する。コンソーシアム合意が最低限の収入を保証してくれる。	参加組織が数百となるとガバナンスが複雑に。新ジャーナルの追加可否やコンソーシアム参加費用などの民主的決定方法といったことも含まれる。潜在的にはただ乗り問題もあり、メンバーであるということの魅力的なメリットが必要。	多くのジャーナルをまとめてOAに転換できる可能性。参加機関が増えれば増えるほど、各機関の支払額が減る。	コンソーシアムが突如崩壊した場合、ジャーナルは魅力的なモデルを考えるのに苦労するかもしれない。購読料をOA費用に振り替えるだけで、出費が減らないのであれば、図書館にとってメンバーになるインセンティブはないかもしれない。
	8.5 そのほかの非APC資金源		分析は示されていない							